

令和6年度

第43回

全国中学生 人権作文コンテスト — 山口県大会入賞作文集 —



人権イメージキャラクター
人KENまもる君

人権イメージキャラクター
人KENあゆみちゃん

主催 山口地方法務局
山口県人権擁護委員連合会



第43回全国中学生人権作文コンテスト山口県大会表彰式

令和6年12月21日(土) 於：不二輸送機ホール(山陽小野田市文化会館)

第四十三回

全国中学生人権作文コンテスト

山口県大会 入賞作文集

は し が き

法務省と全国人権擁護委員連合会では、次代を担う中学生の皆さんが人権問題に関する作文を書くことを通じて、お互いの人権を尊重することの大切さや基本的人権についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身に付けることを目的として、昭和五十六年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しており、今年度は四十三回目となります。

山口地方法務局と山口県人権擁護委員連合会において、本年度もこの作文コンテストの山口県大会を実施したところ、県内一―四校から、四、七七八編の応募がありました。

応募作品の内容を見ますと、中学生が身近な人権問題としてとらえている「障害者」に関する作品や「SNS上での誹謗中傷」が題材となった作品が多く見受けられました。特に、障害者に関する作品については、自らの体験を基に、人権について考え、自分の将来について言及している作品も寄せられており、どの作品も基本的人権について、自分はこのように考えているという、確かな意見や、率直な気持ちが表示されています。

この作文集には、山口県大会における入賞作品十三編を収録しています。この貴重な作品を少しでも多くの方にご覧いただき、中学生の皆さんの体験を自分のものとして考えることで、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

終わりに、作文コンテスト山口県大会の実施に当たり、熱意を持って作品を応募いただいた中学生の皆さんを始め、御指導、御協力いただきました先生方及び御後援いただいた関係機関の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

令和七年二月

山口地方法務局長 中島仁志
山口県人権擁護委員連合会長 上田雅憲

目次

- ・最優秀賞【山口県地方事務局長賞】（中央大会 奨励賞）
余命が短い人の人権とは
萩市立萩東中学校
一年 松浦羽未
：
1
- ・優秀特別賞【山口県人権擁護委員連合会長賞】
マスクから学んだこと
周南市立菊川中学校
二年 迫まりあ
：
5
- ・優秀特別賞【山口新聞社賞】
優しい心の持ち主
山口大学教育学部
附属山口中学校
一年 松本 憩
：
9
- ・優秀特別賞【山口県PTA連合会長賞】
「当たり前」の世の中に
下松市立末武中学校
三年 曾我美咲
：
13
- ・優秀特別賞【NHK山口放送局長賞】
帰ってきた博之おじさん
山口市立阿知須中学校
二年 片岡恵万
：
17
- ・優秀特別賞【レノファ山口FC賞】
人間らしく生きる権利を奪うもの
下関市立安岡中学校
二年 池田果凜
：
21

大切な命

防府市立桑山中学校

三年（非公表）

∴
25

「障害」ではなく「個性」

周南市立岐陽中学校

三年 吹田 蓉子

∴
29

妹がいてくれるからこそ

長門市立日置中学校

三年 三好 祐真

∴
33

よりよい関係を築くために

岩国市立岩国中学校

三年 田上 侑芽

∴
37

心のものさし

柳井市立大畠中学校

二年 松岡 葉月

∴
41

思いやりのある未来へ

山陽小野田市立
厚狭中学校

一年 豊嶋 花萌

∴
45

自分らしく生きる

（非公表）

（非公表）

∴
49

・奨励賞 作品名・学校名・氏名のみ掲載

誰もが安心して
過ごせる社会を願って

「言葉」と人権

命が輝き笑顔あふれる世界を

私の大好きな妹

ハートマークとプラスマーク

きょうだい児

障がい者が働くこと

見える・見えないを越えて

防府市立佐波中学校 三年 鈴木愛結

防府市立国府中学校 三年 達川世奈

岩国市立玖珂中学校 三年 末廣朋奈

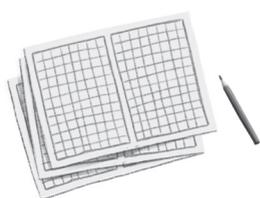
下関市立川中中学校 二年 森田真央

下関市立長府中学校 三年 片山実由

宇部市立黒石中学校 一年（非公表）

山陽小野田市立厚狭中学校 一年 渡邊諒也

宇部市立桃山中学校 二年 菊池 暖



最優秀賞【山口地方法務局長賞】

（中央大会 奨励賞）

余命が短い人の人権とは

萩市立萩東中学校 一年

松浦 羽未

「人権」ってなんだろう。人権という言葉はよく耳にするけれど、上手に説明することはできない。

調べてみると、「人権」とは、一人一人が生まれた時からもっている「自分らしく生きる権利のことだ」と書いてある。

「自分らしく生きる」という言葉で思い浮かんだのは祖父のことだ。祖父は副腎癌で亡くなった。

祖父が自分の病気を知ったのは亡くなるたった二ヶ月前のことだった。体調不良で緊急入院し、詳しく検査をしたところ副腎癌であることが分かった。副腎癌は希少癌で珍しく

治療法が確立されていないそうさ。それに、祖父は癌が分かった時点で他の臓器にも転移しており、末期の状態だった。

私たち家族は、症状と余命を祖父に伝えるかどうかの選択をする事になった。症状を知ったら、祖父は気持ちが悪く落ちてこんでしまうから詳しく伝える事はやめた方がいいのではないかと考えた。「私だったら・・・」と考えてみたが、自分があと少しで死んでしまうなんて全然想像できなくて結局どうしたらいいかなんて決めることが出来なかった。最終的に「本人に伝えて残り少ない人生を祖父の好きなように過ごしてもらいたい」と思い伝えることになった。

病院の先生から告知を受けた時の祖父は何も言わずただうなずいていたそうさ。よくドラマで見るような、泣きわめいたり、怒ったりすることはなかった。唯一祖父が希望したことは「家でみんなと過ごしたい」ということだった。祖父の願いを叶えるため、家族みんなが協力した。自宅で過ごせるように、祖母はインシュリンという注射の練習をした。母は介護休業を取って祖父の介護を始めた。私は何をしてあげることが出来るのだろうか。そう悩んでいた時に、「家に行って元気な姿を見せてあげることが一番喜ぶよ」と言った。私は兄弟と一緒に、毎週末祖父に会いに行った。いつも元気で、体を動かすことが大好きな祖父がベットに寝ている姿はなんだか不思議な感じがした。私たちが会いに行くと祖父

はとても喜んでくれた。「みんなが来てくれるとじいじの笑顔がいっぱい見られるよ」と祖母は言ってくれた。私たちがご飯を食べていると、祖父はベットを起こしてずっと私たちの様子を眺めていた。

症状が進み、動けなくなっても、痛みが強くなっても、食べたいものが食べられなくなっても祖父はいつも静かに耐えていた。「もっといろいろ言ってくれたらいいのに」と母はいつもそう言っていた。

自宅で過ごすために、祖父の家にはいろいろな人が来てくれた。ケアマネジャー、訪問看護師、訪問診療の先生、訪問入浴のスタッフなどいろんな人が祖父の自宅での生活を助けてくれていた。残された時間の短い祖父に、みんな笑顔で声をかけてくれた。「調子はどうですか？」「夜は眠れましたか？」「痛みはないですか？」「口数の少ない祖父は「大丈夫です」としか返事をしなかつたけど、表情を見ながら体を拭いてくれたり、着替えをしたり祖父のことを考えてくれた。祖父の意識がなくなつてからもそれは変わらなかつた。一番印象に残っているのは、担当の先生が意識のない祖父に優しい表情で「こんにちは。お孫さんいっぱいうれしいですね。」と話しかけている姿だった。もちろん祖父は返事もしないしうなずきもしない。でも先生は手をさすって、優しく声をかけてくれた。亡くなつた時もそうだった。息もしていない、心臓もとまった祖父に、手をさすりながら「お疲

れさまでした。よく頑張っちゃったですね」と声をかけてくれた。祖父は家族全員が見守る中静かに息を引き取った。祖父の望んでいた「最後まで自宅で過ごしたい」という願いは叶った。

末期がんなどで余命の短い状態や、意識のない状態にある人の人権とは何だろうか。

私は「人はどんな状態にあっても一人の人間として、自分のことは自分で決め、その意思が尊重され、自分らしく生きること」ではないかと思う。祖父が最後まで多くを語らなかつたのも、それを静かに見守った私たち家族も祖父の「人権」を大事にできていたのでないかと思う。何も言えない、反応もない祖父に変わらない声掛けを続けてくれた、看護師さんや先生も祖父の「人権」を大事にしてくれていたのだと思う。

私は看護師を目指している。祖父の家での闘病の様子や最後の瞬間に立ち会って、看護師という職業が正直怖いとも思った。でも、今回の経験で感じたことや、考えたことを胸に、患者さんの人権を大事にできる看護師になりたいと思った。

「人権とは何か」をこれからも考えながら夢に向かって進んでいきたいと思う。

マスクから学んだこと

周南市立菊川中学校 二年

迫 まりあ

コロナ禍も終わり、周りのみんなが少しずつマスクを外し、マスクをしている人の方が珍しくなった時、私はマスクが外せずにいました。その理由は、私が一瞬マスクを外した時に、友達から「ブス」「ゴリラみたい」と言われたからです。私はとても傷つきましたが、その時私は平気なフリをしました。しかし、気候も暑くなつて、スポーツをする時や屋外では熱中症の危険もあるため、周りの大人からはマスクを外すようにと言われました。しかし、私はあの時友達から言われたことが気になり、マスクを外せませんでした。親や私を心配してくれる大人達からは、「命に関わることだから、外しなさい。」と何度も言われました。私は、親に外せない本当の理由も言えずに「来月外す」「来週には外す」「外してない子がまだいるもん」と言つて、外さない言い訳をずっとしていました。

しかし、スポーツをする時にマスクをしている子がほばいなくなつた時、マスクをしていると、「なんでもの子は、マスクをしているの？暑くないの？」という不思議な目で見られるようになりました。私に「ブス」「ゴリラみたい」と言つた子も、「マスクなんで外さないの？」「外せば」と言つてきました。私は、とてもイラ立ちを覚えました。私がマスクを外せない理由は、その言葉のせいなのに、その子は何も思っていないんだと思いました。また逆に、私も何気なく友達に言つた言葉が、相手を傷つけ、前に進むことを遮っているかもしれないと思いました。

でも、どうしたら相手を傷つけずにすむのか考えてみました。

まず第一に、人の容姿についてからかうことは、相手が自分でそう言つていても、言つてはいけないと思ひました。また、私もですが、言われる相手によつては、受け流せる子と、この子に言われたら傷つく子と違いがありました。つまり、みんなが言っているからといって一緒になつてからかうことはいけないと思ひました。

第二に、世間で話題になつていている常識や昔からの考えを押しつけ、少しでも道から外れると、非難をし、あたかも自分は正義だという考えをもつことです。今回の私のマスクの着脱についても、コロナ禍ではマスクをしないと悪者だと思われ、コロナ禍が終わればマスクをしている方が変わり者と思われれることです。人と違うことや意見をもつ人に対して、

何の理由も聞かず理解を示さずに、頭から非難し、傷つけ、仲間外れにすることは、今後多様化していく世の中に逆行していることだと思いました。人には、いろんな考えや育った環境や立場によってみんな違うし、いろんな意見があるからこそ、人を知れる機会だと思いません。時には、ぶつかることも必要ですが、相手を敬うことや、想像することを大事にすれば、相手を傷つけることはなくなるのではないかと思いました。

第三に、「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があるように、親しい人に対しても礼儀を重じることだと思えます。私の場合、いつも仲良くしている子から言われた言葉だったため、余計に傷つきました。その言葉は、相手にとっては冗談のつもりだったと思いますが、私にとっては仲の良い友達からの言葉は本当にそう思っているのだと思いました。

例えば、いじめや虐待でも同じことが言えると思えます。友達や親など信頼している人から受けたものは、最初はからかいや、しつけどと思うけれど、受けている本人が、私のように平気なフリをしてしまえば、この子なら大丈夫だと思われ、どんどんエスカレートしていき、取り返しをつかえないような心の傷を受けていくのだと思います。信頼している友達や家族だからこそ、言うてはいけないこと、伝えなければいけない感謝の気持ちが大事だと思いました。

私は、先月ようやくマスクを外すことができました。マスクを外すだけで、こんなにも

苦労し、誰も理解してくれないことにイラ立ちを覚え、涙もたくさん流しました。でも、外せない理由を知った家族が味方になってくれたり、周りの大人達が静かに見守ってくれたので外すことができました。友達もいつも通り接してくれたので安心しました。私の周りには、まだマスクが外せない子がいます。人と違って浮いているように見えます。でも、私は自分の体験から、何か理由がある、みんなと一緒になければいけないという理由もないと思っています。

世の中、一緒になければいけない人もいるかもしれませんが、そういう人達もみんな個性はあって、同じ人は一人もいないと思っています。最近、同調圧力という言葉を目にしますが、多数意見が少数意見を非難し、排除していく動きにはとても胸が痛みます。私は相手を否定することより、いろんな意見・個性を認めあっているような人間になりたいと思います。

優秀特別賞【山口新聞社賞】

優しい心の持ち主

山口大学教育学部附属山口中学校 一年

松本 憩

「良く言えば、優しい心の持ち主。悪く言えば、何も気づいていない。」
これが私の弟だ。

中学生である私と、小学生である私の弟の帰宅時間がたまたま重なった時があった。向こうから歩いてくる弟を見ると、おばあさんと高学年の女子児童と一緒にしゃべりながら歩いてくる。私はまた弟が知らない人と勝手にべらべらしゃべりながら帰宅していると思った。注意しようと思ひ、私は家の前で弟を待ち構えた。

すると、おばあさんが、

「この子のおねえちゃんですか？いつもありがとうございます。この子のおかげでいつも楽しく学校から帰っていますよ。本当におもしろい優しい子やねえ。」

と、声をかけられた。私は思いがけない言葉に、はいとしか言えず、驚いた。弟はおばあさんと女子児童に手を振ってさようならの挨拶をしていた。

私は弟にあの女子とおばあさんは誰なのかを問い詰めたが、

「知らん子や。」

としか聞けず、何回聞いてもうるさい、と言われるだけだった。

夜に母に出来事を話すと説明してくれた。母も以前に同じようなことがあったようでおばあさんと話したことがあった。その女子児童は六年生で支援学級に所属している。おばあさんはその子が一人で帰宅することが困難なため、毎日女子児童のお迎えをしているのだった。低学年の時はそれでもお友達が一緒に帰宅してくれていたが、高学年になると友達とも疎遠になつてしまい、いつの間にかおばあさんがお迎えに来るようになったらしい。毎日二人で帰宅する日々が続いていた時に、同じ通学路の弟とひんぱんに会うようになったのだ。弟はいつも帰宅の途中で、道ばたの花をつんだり、草をとったり、虫を捕まえて遊びながら帰宅している。ある時、自分の捕まえたバッタを自慢するのにおばあさんと女の子に見せたら二人ともとても喜んでくれた。それから事あるごとに、弟はいろいろなものを帰り道に二人に見せて説明している。おばあさんと女の子は帰り道がとても楽しくなつたようだ。母はおばあさんから

「他のお友達と一緒に帰ってくれないんですよ。ぼくだけ、いつも楽しく帰ってくれててもうれいんです。」

と、お礼も言われたようだった。

母もその時は、さすがに驚いたと言っていた。

私は母と弟について分析してみた。私の弟は体育以外の成績はあまりよくないし、勉強が嫌いである。けれどもお友達のこととは大好きで、いつも誰かと遊ぶ話ばかりしている。毎日スイミングにも通っているが、特別速いということはなく、同じ仲間達と一緒に泳ぐことが楽しくて通い続けている。夏休みにも家で留守番もできるのに、友達と会えないことが苦痛らしく児童クラブに通っているのだ。友達が大好きすぎる弟なのだ。

弟はきつと、毎日帰り道に会うおばあさんと女の子のことを特別扱いしていない。ひんぱんに帰宅時間が重なって、自分の友達リストに入れたのだと思う。自分も楽しい、相手もきつと楽しい、と違って一緒に帰っているのだ。毎日おばあさんと帰っている不思議な女の子がいるなんて思ってもいないのかもしれない。すごい才能だと感じた。私ならどうだろうか。高学年の時、支援クラス所属のクラスメイトが確かにいた。しかし一日のほとんどを支援学級で過ごしていたその子と一年間ほとんど関わることはなかったと思う。話すこともないし、機会もなかった。見て見ぬふりをしていたのかもしれない。自分から話

そうと思えばしゃべりにいけたかもしれないのだ。おばあさんが、低学年の時は一緒に下校する友達がいたと話していた。きつと私もその女の子の周りの子達も、成長するにつれて強い意識をせず支援学級所属のクラスメイトと距離を取ってしまったのかもしれない。

「勉強はできないけど、そういう優しいところがあるのよ。そういうことって生きていく中で、実は一番大事だったりするのよ。」

と、母は言った。

そうか、と思った。周りにいる人達と平等に接していない自分に気づいた。無意識に線引きしていた。

私はこれまでの生活で、友達に助けってもらったことがあるし、周りの人達の存在だけで心が穏やかになることもあった。色々な人に助けられて生きている。何も考えずに自然体で皆と楽しみながら生き抜いていける力が弟にはあると思う。私は弟のことを少し見直したのだった。

優秀特別賞【山口県PTA連合会長賞】

「当たり前前」の世の中に

下松市立末武中学校 三年

曾我 美咲

私は身近に障がい者がいるのが普通だった。私には自閉症の兄がいるからだ。兄は言葉が話せず、急にパニックを起こすこともある。でも、私はいつもニコニコしている兄が大好きだった。兄が笑顔でいるだけで、家族に温かさをもたらしてくれる。そんな兄について考えさせられる出来事があった。

中学二年生の春、家族で県内の観光地に行ったときのこと。その日は絶好のお出かけ日和で、多くの観光客が訪れていた。車を降り、列に並ぶところまではよかった。しかし、道路を横断しようとしたとき、兄がパニックを起こしてしまった。兄は人ごみが苦手なのだ。その瞬間、周りからの冷たい視線が飛んできた。それでも私たちは「行くよ、行くよ」と兄に必死に声をかけた。すると、道路の交通整理をしていたおばさんが、

「そこ、通路なのでよけてもらえますか？」と迷惑そうな顔で言ってきた。そのとき私は、なんでそんなことを言うのだろう、と不思議に思った。「通路。」私たちはその通路を通ろうとしていたのに。通りたいのに通れない人は渡ってはいけないのか。障がい者とその家族の立場に立ってはくれないのか。私の頭の中は、はてなでいっぱいになった。

この出来事から一年。私は中学三年生になった。三年生は、修学旅行という大きなイベントがある。修学旅行二日目、私たちは研修班で京都市内を自由に回った。私たちが乗ったバスの中は非常に混雑していたが、なんとか座ることができた。しばらくして、車いすの女性が乗ってこられた。初めて見た光景だったが、それより驚いたのは周りの反応だ。誰一人嫌な顔をしたり急かしたりせず、普通に待っていた。さらに、混雑しているのにもかかわらず、その女性が乗るスペースをつくるため、人がさつとよけたのだ。みんな無言で、まるでそうするのが「当たり前」かのような雰囲気だった。私は心が温かくなるのを感じた。ほんの少しの気遣いかもしれない。しかし、その少しをみんなができることは素晴らしいことだと思った。そして、その女性は笑顔で降りていった。

バスに揺られること約三十分。私たちは「あと二駅だね」と話していた。そのとき、若い男の人が乗車されて、一直線にこちらに向かってくる。そして、班員が座っていた窓ぎ

わの席に無理矢理座ってきたのだ。班のみんなは、「えっ？」や「何何？怖い」と驚いていた。一方でその男性は、座れたことにほっとしたのか、笑っている。私は、自閉症かなにかかな、と思った。障がいの中には、決まったところでないと座れないという特性もある。私はみんなに、

「あそこの席が落ち着くんじゃない？」

と言ってみた。それでもみんなは、その男性を変な目で見続けていた。私ははっとした。この目を見たことがある。兄がパニックを起こしたときの周りの視線。交通整理のおばさんの目。私はあのと感じた疑問を思い出した。なぜ障がい者の立場に立つてくれないのか。班のみんなはクラスメイトに、「聞いて聞いて、やばい人いた」とか「不審者いたんだけどー」などと話している。私はそのとき気付いた。障がい者差別は無意識に行われているのではないか。目に見えない障がいには理解されにくい。私はどうしたらみんなが理解してくれるのか考えた。

障がいは個性。そう言う人もいる。障がい者も同じ「人」なのだと感じる良い言葉だ。しかし、私は少し違和感を感じる。障がいは障がいなのだ。それは変えられない事実である。かといって、それを理由に健常者と障がい者との間に線を引き、差別の目で見るのはいけない。私が考えた末に思ったのは、「障がいを知る」ことが一番大切だということ。交

通整理のおばさんも、研修班のみんなも、障がいを知らないから障がい者を「迷惑な人」、「変な人」だと認識したのではないか。障がいには様々な種類や特性がある。もしその知識があつたら、みんなも温かく見守ってくれたのかもしれない。知ることこそ、障がい者を理解する第一歩なのだ。

そして、実際に障がい者と接すること。やはり知識だけでは分からないことはたくさんある。障がい者と共に喜びや悲しみを経験することで、障がい者を「一人の人間」として見ることができると思う。そのためには、障がい者との関わりの場を増やすことが必要になってくる。

一人一人が、障がいのことを他人事と思わず、自分事と捉える。そうしたら、障がい者がいることが「当たり前」の世の中になっていくだろう。

優秀特別賞【NHK山口放送局長賞】

帰ってきた博之おじさん

山口市立阿知須中学校 二年

片岡 恵万

「プルルルル、プルルルル」

ある夜のこと、自宅の電話が鳴った。最近では固定電話を持たない家が多いためか、我が家には、セールスの電話がよくかかってくる。そのため、私が電話を取ることが多い。電話を取ったのが子供であれば、相手も諦めて切ってくれることがあるからだ。

その夜の電話は、とりわけおかしい電話だった。相手は高齢の男性で、名前を名乗った後に、

「戦争で亡くなられたカタオカヒロユキさんのご家族の方ですか。」
と尋ねてきた。

確かに名字は同じだが、聞いたことがない名前だったし、そもそも戦争とは？と私は混

乱した。正直、新車の詐欺電話かと疑いもしたが、普段かかってくる「不要な自転車があれば売りませんか」とか、「八〇才以下の方なら加入できる保険があるのですが」といったような電話に比べて、内容がやけにリアルだったことが気になって、受話器を押さえたまま母に確認した。

母は、その名前は知っているようだったが、戦争で亡くなったという所に心当たりがないらしく、母から祖母へ、そして祖父へとバトンが回っていった。受話器を突然渡された祖父も、困惑して話を聞いていたが、途中から話がつながってきたようで、最後には何かお礼を言って電話を切った。何事かと祖父に話を聞くと、電話の主は、下関市在住の男性ということでした。

—— 山口市内のある神社が、日清・日露戦争の際、祈願して出征した氏子全員が無事帰還したことから、弾除け神社として知られるようになった。このことから、出征する兵士を見送る沢山の家族が、無事の帰還を祈ってその神社に兵士の写真を奉納した。その数は2万枚にもなった。戦後、神社では奉納された写真を家族のもとへ届ける取組をずっと続けてきているが、今もなお家族に返すことができている写真が多数ある。電話の主も親族の写真が奉納されていた事実を知らずにいた所、ボランティアで写真返還を行っている方に探し当ててもらい、思いがけず親族と写真で対面することができた。その出来事に感激

し、以後、写真の返還活動を手伝っている。このたび、奉納写真に添えられていた住所と名前から、もしかして事情を知っているのではないかと、我が家に電話をかけてみた。

祖父によると、片岡博之というのは、私にとって曾祖父の弟にあたる人だそうだ。二十代前半で出征し、戦禍を乗り越えて終戦を迎え、無事に故郷山口へ帰ってきた。その後、結婚し、子供や孫にも恵まれた。写真が奉納されていた事実は全く知らなかったが、話を聞くと、本人に間違いなさそうだ。

そして翌月、一通の封筒が届いた。中を開けてみると、そこにはセピア色の薄い紙に包まれた、写真館で撮ったとみられる若い男性の姿があった。詰襟に身を包み、まつすぐこちらを見つめていた。写真の下には几帳面な字で「昭和拾七年三月 片岡博之 當年廿三才」と書かれている。今の二十三才と言えば、おしゃれで若いお兄さんというイメージがあるが、写真に写る男性からは、強い意志と覚悟のようなものを感じた。私が生まれた時には既に亡くなっていたため、これが博之おじさんとの初めての対面だった。奉納したのは、恐らくおじさんの両親だったと思う。

この写真を見ながら、私は深く考えた。戦時中は、国のために命を捨てることが美德という考え方だったと聞く。そんな時代に、出征する家族が無事に帰還するよう祈願することとは、良くないとされることだったのではないだろうか。それなのに、博之おじさんの写

真は家族によって奉納された。しかも、他の奉納写真と比べても、とりわけ大きなサイズだったようで、写真が気軽に撮れる時代ではなかった当時、そのサイズの写真は相当の金額だったそうだ。このことから、子供を戦地に送り出す親の気持ちが痛いほど伝わってきた。

終戦から約八〇年が過ぎ、日本は平和な国になった。学校でも、一人ひとりがかけがえない尊い生命の主体者で、自分の命も他人の命も大切にしなければならぬと習う。家族が幸せであつてほしいと願うことも自由にできる。今では当然のこれらの権利が制限された時代にあつても、人々はやはり同じように家族の無事を、幸せを願つたのだ。表立つて祈れなかつたであろう、戦時中の家族の想い。我が家に八十余年ぶりに帰つてきた博之おじさんの写真から、人権が守られる世界の素晴らしさ、ありがたさを時を超えたメッセージとして私は確実に受け取つた。

過去を生きた先人の努力によつて作り上げられた平和な時代。一人一人が大切にされる世の中という尊いバトンを受け取つた私たちは、それをしっかりと守り、次の世代に受け継いでいかななくてはならないと強く決意した。

優秀特別賞【レノファ山口FC賞】

人間らしく生きる権利を奪うもの

下関市立安岡中学校 二年

池田 果凜

「川岸に捨てられたんだぞ」

「ウソだあ！」

それが私が祖父のこの話を聞いたときの第一声だった。私がまだ小学校の低学年の頃だったと思う。祖父は続けた。

「姉がたまたま通りかかって気づいてくれた。姉は背負っていたリュックの中身をその場に全部出して、空になったリュックにワシを入れた。息ができるように顔だけ出して。」

私の祖父は昭和十九年生まれの八十歳。終戦が昭和二十年だから、終戦の年祖父は一歳前後ということになる。

祖父の父は、満州で歯科医を営んでいた。満州は現在の中国の東北部にあった地名だ。

祖父の母は、助産師をしていて忙しかったため、家にお手伝いさんが三人もいたと言う。

「なんで捨てられたの？」

そう聞くとゆっくり答えた。

「日本が戦争に負けて、着の身着のまま、逃げるように日本に帰らないといけなくなった。とにかく兄、姉が多かったから、一番年が下の、まだ親の顔を覚えていない赤ん坊のワシを捨てて帰ることにしたんじゃない？」

つまり、祖父は実の親に捨てられたのだ。運が良ければ現地の中国人が拾って育ててくれたかもしれないが、運が悪ければ誰にも拾われずその場で死んでいたかもしれないなかったという。

そんな辛い思い出を私の祖父は笑って面白おかしく、今思えば努めて暗くならないように話してくれた。

「親を憎まなかったの？」

と私が聞くと

「そりゃ憎んださ。姉からこの話を聞いたときは。だから親父が死んでもずっと墓を建ててなかった。でもワシが四十歳くらいで、病気になって入院した。その時に同じ病室にいた人にふとそんな昔話をしていたら言われたんだ。」

「あなたは赤ちゃんだったから、分からなくて当然だけど…。それが戦争というものなん

ですよ。当時、満州の川にはたくさん捨てられた日本人の赤ちゃんがいました。五、六歳以上だと親も情があるし、拾う中国人も自分になつかせるのは苦勞する。だけど、赤ん坊なら、また親の顔を覚えていないから、中国人の拾った人が自分の子として育てやすい。日本が戦争に負けて食べ物がない時代、中国に帰国して家族全員に十分なご飯を食べさせるのは不可能に近かった。生まれたばかりの、可愛い盛りの子を捨てるのが、親にとってどんなに辛い選択だったか、難しいかもしれないけれど想像してみてください。戦争とはそういうものです。人として生きる権利や親の下で生きる権利さえ奪っていく。それが戦争です。」

私の祖父はたまたま同じ病室になった戦争を経験したであろう男性の話を聞いて、親の墓を建てようと気持ちが変わったそうだった。

それから祖父は日本に帰って、自分の記憶がある小学生になった頃の話をしてくれた。ある日、近所の方が家にかけてこんで来た。

「あんたのお父が畑で倒れてるぞ！」

くわを持ったまま、畑の上で後ろにひっくり返っていたそうだった。ガリガリにやせて骨は浮き出て、満州にいた頃の写真とは似ても似つかぬ姿だったらしい。そのまま亡くなった。

「お父、食わんのか？」

食事のとき、そう聞くといつも

「わしゃ最近胃の調子が悪くてな。悪いが、お前たち、わしの分まで食うてくれ。」

祖父の父は、いつもそう言ってははじめの一、二口食べると残りは食べ盛りの子供たちに全て渡していた。二週間に一回、配給のお米が配られたが、ほんの二合だったため、おかゆより薄いおもゆにして食べていたそうだ。一人分では全く量が足りず、少しでも子供たちに食べさせるために、胃が悪いとウソをついたのだ。子供たちは毎日空腹だったから、食べてくれと言われれば喜んで食べていたら父親が栄養失調で亡くなったのだ。

今回、人権について考えたときに、私は真っ先にこの祖父の体験が頭に浮かんできた。人が人らしく生きられなくなる、それが戦争というものなのだと強く感じたからだ。

二〇二二年ロシアがウクライナ侵攻を始めたとき、祖父は言った。

「戦争に勝っても、誰か一人でも犠牲になれば、その身内は悲しみに暮れる。自分の大切な人は戦死したけれど、戦争には勝ったから嬉しいです、とは絶対ならない。だから戦争は絶対にしてはいけないんじゃない。」

この言葉は祖父の実体験から出た言葉だ。いつかこの話を家族以外の人にも聞いてほしいと思っていた。

平和な日々の中で、忘れがちになるが、人の命と人が人らしく平等に生きる権利がいかに大切に尊いかを考えるきっかけとなった。

優秀賞

大切な命

防府市立桑山中学校 三年

（非公表）

私は、心室中隔欠損と肺動脈閉鎖症という心臓の病気を持って生まれてきました。合計三回の切開手術・心臓カテーテル検査など、苦しくて泣きたくなるような経験を経て大きく成長してきました。今、思い返してみてもあのときは辛かったなと感じます。だけど、違う考え方をすれば「心疾患患者だけが伝えられることがある。」と考えます。

この病気を経験して最も苦しかったことは、三回目の手術でした。赤ちゃんの頃と比べて体の機能が大きく発達しているため、手術への不安も大きかったし、より痛みを感じやすくなっていったからです。集中治療室から一般病棟に戻った日は痛み止めも切れて「痛い、痛い。」と連呼していました。他にも、ずっと寝たきりで体勢を変えなくなるけど、体の至る所に管があり、なかなか一人では動けず、看護師さんや母が手伝ってくれました。その

ときの母は、「こんなに苦しむ娘を見たことない。」と思つたそうです。苦しい反面うれしいこともありました。私自身や周りの人達のがんばりのおかげで後遺症も残らず手術から約十日ぐらいで退院できたことや普段長い時間を一緒に過ごすことができない母とたくさん過ごせてうれしかったです。

この病気になつたことだと思います。それは、健康な子は生後何日かすれば家に帰られたり、制限なく運動ができることです。私は生まれてすぐに集中治療室に入ったため、家族との面会時間が少なかつたり、赤ちゃんの頃は入退院を繰り返していたので、あまり外に出かけて遊んだ記憶がありません。このように、私は健康な子と少し違う生活をしてきました。

そういう訳で小さい頃は、ちよつとした風邪でも命に関わるかもしれないので病院と家がほとんどでした。同級生との関わりが少なく、幼稚園に入園したとき毎日のように「ママがいいの。」「おばあちゃん、一番で迎えに来てね。」と大泣きしながら登園していました。とにかく初めてのことでだらけで毎日、目から大きいしずくがあふれていました。

しかし、私が年長のときに友達がダンスを習っていてその子が「ダンスの体験に来る？」と言いました。主治医から運動の制限は出ていなかったし、両親は私が障害者だからといって特別扱いをしていないため、母に「やってみたい。」と言うと「やってみなさい。」と

勧めてくれました。そこで、友達とダンス教室に一緒に通うことで友達と遊ぶことが楽しいと思うようになり、友達の大きさが分かりました。でも不安なこともあります。

それは私の胸には手術の後の大きな傷があります。それがプールのときに見えて友達から「その傷どうしたの？」と聞かれたときの事です。今なら、「心臓の手術したんだよ。」と堂々と言えるけど、昔の私は臆病で泣き虫でのび太みたいな性格でした。同級生に何か心無い言葉をかけられるのではないかとおびえて何も言い返せませんでした。この経験から病気は隠すものではないと考えました。十人十色で違うのだからそれを個性として捉えようと思いました。自分からこういう病気なんだとアピールするのではなく、聞かれたら答えるように心がけています。

次に、外来に行ったときの出来事です。私が行く病院にはさまざまな病気を持った子がいます。私と同じような病気の子・車椅子に乗っている子・発達障害の子などが来院しています。よって、病気には人の目に見える病気と目に見えない病気があることを知りました。

この病気になって私がみなさんに伝えたいことがあります。それは、見た目や中身が違っても人は平等に人権を持つていることです。小学生の頃に、病気の影響でふくよかな体型の子がいました。その子が、同級生から見た目に対しての悪口を言われたと言っ

した。それを聞いて、どうしていじめる人はそんな事を言っただろうと思いましたが。人なんて一人一人違う性格・見た目・考え方をしているのだからそういう子がいたって当然です。

このように、みんな必ず生まれたときから人権を持ってこの世界に生まれてきています。基本的な人権は、国民全員が持っている全ての人が大切にされるためにあります。でも現実では、いじめ・差別・人権侵害といった事例で苦しんでいる人がいます。そこで私は、医療の仕事に就きたいと考えています。それは、入院して医療従事者と患者の関わりを実際に見てすばらしいと思ったからです。一番の理由は違います。私のような人への偏見をなくすことです。私だったら患者さんと同じ視点で考えることができるし、困っている人がいたら救いたいです。最終的には、世界中の人達が各国で行われている人権についての活動を知り、一人一人の協力で少しでも障害者の差別・偏見がなくなる日を作るのが義務だと私は考えます。

「障害」ではなく「個性」

周南市立岐陽中学校 三年

吹田 蓉子

私は注意欠如・多動症という発達障害を持っています。皆さんは「発達障害」と聞いてどんな印象を持つでしょうか？発達障害とは、生まれつきの脳機能の偏りによって日常生活に困難が生じる障害です。私はよく忘れ物や失くし物をして注意されたり、計画的に勉強ができずに成績が上がらなかつたり、思ったことをそのまま口にしてトラブルになつたりします。

しかし、私はこの特性を忌むべき「障害」ではなく、自分だけが持つ「個性」だと思っています。世界にはさまざまな人がいます。繊細な人、引つ込み思案な人、それぞれが自分なりの個性を持って生きています。私の「個性」は、不注意で多動で衝動的かもしれませんが、それも一つの「個性」だと考えています。

それでも、社会における発達障害者への風当たりは決して弱くありません。小学生のとき、クラスメイトが私について「あいつ、空気読めないし変だから話さない方がええよ」と話しているのを聞いたとき、自分の存在が拒絶されていると思いました。その瞬間、心が重くなり、胸が苦しくなりました。「私のような障害者は何をしてもどうせ社会の異物なのだろう」と思い、深い悲しみと孤独に苛まれました。

その日から、周囲の人が私の陰口を言っているのではないかと不安になり、クラスに居づらくなりました。実際に、悪口や嫌がらせもありましたが、親を心配させたくない、自分を攻撃してくる人たちに屈したくないという思いから、誰にも相談せず、ひたすら我慢していました。

我慢しすぎた結果、私は家で爆発するようになりました。外では何を言われても笑顔で振る舞っていましたが、自分の物や家族に当たっていました。そんな中、学校で実施された教育相談で、一人の先生が私に「君に対する周囲の風当たりは強い」とはつきり言われたときは驚きました。他の先生方は私が発達障害者だからと配慮して曖昧な表現をしていたのに、その先生だけは、私を他の生徒と同じように扱い、率直に向き合ってくれたのです。

その先生に、私は初めて自分が発達障害を持っていることを打ち明けました。先生はい

つになく真剣な顔で「君は個性豊かで面白い。でも、もっと自分を冷静に見つめることができたなら、その個性を活かせるはずだ」と言ってくれました。それまで呪いのように恨めしく思っていた「障害」の特性を面白い「個性」と捉えてくれる人がいると知り、心が救われた気持ちになりました。

そして、周りにも私を理解しようとしてくれる友人や、ずっと支えてくれた家族がいることに気付いたのです。私は「発達障害だから」を言い訳にして、何も行動せずに殻に閉じこもっていたのだと思いました。

発達障害は「病気」ではなく、あくまで「特性」です。だから「治す」必要はありません。しかし、その特性に対して工夫をして生活をしやすいすることはできません。私の場合ならば、大事な予定や持ち物をメモに残すことや、感情的になる前に一度深呼吸をして気持ちを抑え冷静になることが効果的だと思っています。さらに、周囲の人も発達障害についての理解を深め、偏見をなくす努力が必要です。

社会全体が発達障害に対して正しい理解を持ち、発達障害を持つ人々がもっと安心して生きられる環境を作ることが、今後の課題だと思います。

発達障害を持つ自分を少しずつ受け入れ、工夫しながら生きていく中で、私は一つのことに気付きました。それは、「自分自身を受け入れなければ、他人も私を受け入れることが

できない」ということです。私たち一人ひとりが、自分の個性や特性を尊重し、他者の違いを認め合うことで、初めて本当の意味での共生社会が実現できるのではないのでしょうか。私の経験は決して特別なものではありません。同じような悩みを抱える人々がたくさんいることを私は知っています。

だからこそ、私は自分の声を届け、発達障害についてもっと多くの人に知ってもらいたいと強く願っています。誰もが自分らしく生きられる社会を目指して、私はその架け橋になりたいと思うのです。発達障害を持つ人々が自分を否定することなく、自分の特性を前向きに受け入れ、生きていけるように、私もこれからも努力を続けていきます。少しでも社会が変わり、誰もが居心地よく生きられるような未来を築いていくことが、私の目標です。

優秀賞

妹がいてくれるからこそ

長門市立日置中学校 三年

三好 祐真

僕には、妹がいます。二人兄妹です。そのたった一人の妹には、二つの病気と知的障がいがあります。

生後六か月頃に「ウエスト症候群」という難治性のでんかんを発症しました。その時、僕はまだ三歳ではつきりとは覚えていないのですが、母と妹が二か月間の入院でいなかった時は、とても寂しがつていたようです。妹は、治療の甲斐があつて発作は治まったものの、何らかの障がいを伴う可能性があることが伝えられていました。運動面での発達は少しずつ追いついてきましたが、精神面での遅れがあつて知的障がいと診断されました。今十二歳ですが、六歳くらい知能で、少し幼い感じですが。今も発作を抑える薬を飲んでいて、脳波検査も定期的に受けています。

さらに、十歳になってすぐに「一型糖尿病」を発症して、インスリン注射が必要な体になりました。知的障がいもあり、自分でインスリン注射を打つことが難しかったのですが、色々な方に協力してもらって練習し、時間はかかりましたが、血糖値測定もインスリン注射も出来るようになってきました。毎日、一生懸命頑張っています。そんな妹の前で、僕は、つついとお菓子を食べたり、ジュースを飲んだりして、母から注意されることが度々あります。スイーツが大好きな僕の影響もあつてか、妹もお菓子や果物が大好きです。しかし、一型糖尿病を患った今、妹はすごく我慢をしていることを知っているはずなのに、気遣えない自分に情けなさを感じます。

時折、どうして妹ばかりに色んなことが降り掛かってくるんだろうと考えてしまうことがあります。小さい頃は、「兄ちゃん兄ちゃん」と僕の後をよくついてくるかわいい妹でした。僕がいないと「兄ちゃん、どこいった？」と泣く兄ちゃんが大好きな妹でした。僕もそんな妹を可愛がっていたはずなのですが、成長するにしたがつて段々と反抗的になって、ツンツンしたり、言葉が悪くなってきたりと、関わるのが難しくなってきました。感情のコントロールが難しいところがあつて、突然大きな声を出したり、泣き出したりと僕にはなかなか理解できないことをするので、ついイラついてしまうことがよくあります。妹に対して僕なりに我慢している部分もありますが、妹の特性を個性として捉え、もっと優し

く見守ってあげられる兄になっていきたいと思います。

また、妹を通して、障がいのある子どもたちと接することもあります。体の不自由な子、行動が激しい子、お喋りが難しい子など、色々な子どもたちがいます。僕は、未だに自分がどう関わっていったらいいのかよく分からず、距離感がある気がしています。障がいのある人たちの心を理解することは難しいけれど、偏見を持つことなく思いやる気持ちをもって、少しずつ関わっていけるように心掛けたいと思っています。

金子みすゞさんの詩にある「みんなちがって、みんないい」というフレーズが思い出されます。みんなと違ってもいいんだと安心させてくれる言葉です。人それぞれに違いはあると思いますが、そのかすかな違いを面白おかしく、バカにしたり、差別したりすることはとても悲しいことです。違いを個性と捉えられるならば、それぞれの個性を大切にし、みんなが認め合うことが必要だと思います。

この世の中には、障がいがあるのに関係なく、毎日頑張って努力している人がたくさんいます。みんな一生懸命生きています。確かに、障がいがあるということはハンディキャップがあり、弱い立場にあるのかもしれない。だからこそ、健常者が障がい者に寄り添い、見守り、時には手を差しのべて、共に生きることを示す立場にあると僕は思います。ニュースで、福祉施設や学校で起きた事件を見ます。健常者が障がい者を虐待したり、い

じめたりする事件が取り上げられるのを聞くと、とても辛くなります。健常者が障がい者を支えていくことは、大変なことだと思いますが、みんなが思い合い、助け合って生きていく、そんな温かい社会になってほしいし、それが持続できる社会であってほしいと思います。健常者も障がい者も、共に暮らしやすい社会、共存できる未来をつくってほしいと思います。僕なりにこれからも努力していきたいと思えます。そして、いくつになっても「兄ちゃん！」と頼られる兄でありたいです。

優秀賞

よりよい関係を築くために

岩国市立岩国中学校 三年

田上 侑芽

「Aさん、おはよう！」

私は最大限の笑顔で友達に手を振った。すると、私の友達のAさんはマスク越しでも十分に分かるくらいの笑顔を作り、手を小さく上げてくれた。控え目だけど愛嬌があふれているAさんの笑顔を見ると、やっぱり心が落ち着く。

私は小学三年生の時に初めてAさんと同じクラスになった。Aさんは特別支援学級のクラスに在籍する友達だ。それまで全く関わったことのなかった私は、当初どう対応すればよいのがさっぱり分からなかった。悩みに悩んだ結果、私のAさんへの対応は一言でいうと、「特別扱い」だった。Aさんに対しては誰よりも優しく、Aさんが困っていたら自分が誰よりも早く助ける。一見、とても良いことのように思える。しかし、このように特別

扱いをする理由は「Aさんは一人では何もできないから。」「自分はAさんよりいろいろなことを上手にできるから。」という考えを私がついていたからに他ならない。同じ人間という生き物。そんな現実があるのにも関わらず見下すような考え方をもっていた私。今になって考えてみると、そんな私の考え方はまちがっていたと思う。

ただ、「優しくすること」や「助けること」が普通だと考えることができなければ、特別扱いにはならなかった。「Aさんは特別支援学級に在籍しているから」という理由だけで特別だという考えをもち、なんでもAさんを最優先にすることは、間違っていた。私は「支援が必要」という言葉に囚われすぎていたのかもしれない。

小学四年生になり、またAさんと同じクラスになった。そして私は、変わらずAさんを悪気もなく、特別扱いし続けていた。そんな中、私はAさんから手紙をもらった。その内容は、私と同じクラスになることができて安心したことや、私との楽しかった思い出についてだった。一文字一文字が濃く、丁寧な手紙の字。周りが黒ずむくらい書き直されている部分もあって、とても一生懸命に書かれたことが伝わってきた。また、田上さん、田上さん、と繰り返し書かれた私の名前を見て、とても感謝してくれていることが伝わり、とにかくうれしかった。それと同時に私は感じた。Aさんは私を「特別にしてくれている人」ではなく、「仲の良い、普通の友達」と思っていることを。私が勝手にAさんを特別と思

込んでいたことを。

この出来事をきっかけに、私はAさんに対する特別扱いをすぐにやめ、こんな考え方をしている自分を変えたいと思った。そのために、過保護になりすぎたり優しすぎたりしないように心掛けた。しかし、特別扱いをすることに慣れてしまっていた私は、「特別扱いをやめる」という簡単そうだができなかった。いろいろと試してみてもよい結果になったものは、Aさんと私の「異なるところ」ではなく、「共通点」や「良いところ」を多く探すことだった。それにより、Aさんへの対応を少しずつ、特別扱いから変えていくことができるようになっていた。今もそれを続けていて、自分の成長も実感できる機会が多くなっていく。

前までの私と同じで「障害を持っている相手に特別扱いすることは普通」と考える人は多いと思う。だが、私は誤った特別扱いがはじめの種になると考えている。たとえば、特別だからという理由で自分たちとは違うと決めつけて、差別的な考え方をしてしまったり、特別にされていることをうらやましいと思ってしまう……。これらは、はじめに発展するのではないだろうか。「言うことはダメだけど考えることは自由」ではなく、考え方を体を変えることが、はじめを減らすことにつながると私は思う。

中学生になって、Aさんの悪口を私の耳元でこそこそと言ってきた人がいた。それを聞

いた私は、その人にAさんのいいところをたくさん話した。途中までは反論してきていたけれど、話すにつれ黙り込み、結果的に「確かにね。」と、納得してくれた。つまり、私の望む「考え方を変える」ことを実行してくれたのだ。私は三人で友達になれた気がして、とても安心した。Aさんからの手紙がなかったら、私は何もできなかっただろう。

身近な人を尊重する。ちよつと立ち止まって考え方を見直してみる。私にこれらのことを気付かせてくれたのは、私の考え方を変えさせてくれたのは、Aさんだった。どうやって人との関係を築けばよいかを心に刻み、これからもいろいろな人との出会いを楽しんでいきたい。そうすることで、きつと日常が彩られていく。

私の考え方を良い方へと導いてくれてありがとうね、Aさん。

優秀賞

心のものさし

柳井市立大畠中学校 二年

松岡 葉月

中学校生活はめんどくさいなと感じることがある。暑い中の部活があったり、たくさん
の宿題が出されたりするからだ。その中でも一番めんどくさいと感じるのは人間関係だ。
クラスの中にはいろいろな友達がいる。楽しいが、それでもみんなと仲良くするために、毎
日けっこう気を遣うことが多い。例えば、友達にかける言葉は、相手によって使い分ける
ようにしている。

それでも、先日、私はある失敗をした。私と友達が悪気なく言った一言で、相手を傷つ
けてしまったのだ。言われた子は口をきいてくれなくなり、そして距離をおかれてしまっ
た。そのことから、先生たちにこの一件が知られ何人もの先生に叱られた。その当時は、
腹が立って、そのくらいで傷つくくらい弱いあの子が悪いと一緒に言った友達と悪口を言

っていた。今ではすっかり仲良しだが、問題が解決するまでに長い時間がかかった。

今この事を考えてみると、私と友達はその子に対する理解が足りなかったのだと思う。私は、可愛いなと思って言ったが、もしかするとそれはその子にとって、コンプレックスだったのかもしれない。私は、言葉を発する前にその相手ならどのような受け止めるか、考えるかをしっかりと考え、言葉一つひとつの重みを理解しておかなければならなかったのかなと思う。この問題が解決できたのは、最初は友達とその子の悪口を言って、自分が正しいんだと思い込んでいたが、いろいろな先生に叱られている内に自分が悪かったんだと思うことができたからだと思う。いろんな先生に叱られ、大事なことに気付くことが出来て良かったなと今なら思える。

人は心の中にそれぞれ違うものさしをもっている。そのものさしは生かすことができれば個性になる一方で、相手の気持ちを考えず、自分勝手に使うことよって争いが生まれしてしまう。そこで私達は、他にもう一つ、大事にするべきものさしがあるのではないか。それは、みんなの心の中に必ずある同じものさしだ。それは、お互いを尊重するというものさしだ。このものさしさえ使うことができれば、互いに分かり合うことができ、傷つけ合うことがなくなるのではないか。しかし、そう簡単にはもう一つのものさしに気づくことはできない。

なぜなら、同じものさしを心のどこかで持っていたとしても、それは、卑しい心や卑猥な心で簡単にすぐ埋まつてしまうからだ。

中学校生活を過ごす中で、小さい頃に比べだんだん相手を尊重する気持ちが薄れているように感じる。それは、中学生になって仲間と競い合う機会が増えたからだだろう。私が所属しているテニス部では、試合が終わった後、相手への感謝の気持ちを込めて「ありがとうございます」と言つて礼をする。しかし、これはルール化されたものなので、特に負けたときはなかなか本心から礼を言うことはできない。勉強では、ライバルに負けたとき、悔しいという気持ちしか残らず、ライバルがいたことで頑張れたことに気づけずにいる。このように、競争の中でほこりをかぶったものさしは、見つけることができなくなり、いずれどこかに消えてしまうのだろうと思う。

これらのものさしは、大きく見れば戦争のきつかけでもあるのかもしれない。戦争も、もとはと言えば些細な意見のくい違いから勃発する。そんな小さな理由から始まった戦争は、やがて多くの人の心と体を傷つけていく。例えば、最近ロシアのウクライナ侵攻についてニュースがよく流れている。この戦争は、約三年間続いているとても長い戦争だ。ロシアもウクライナも自分のものさしが正しいと思ひ、新しいものさしに気付いていないから戦争が長引いている。いつか誰かが新しいものさしを示せば戦争は終わるのではない

かと思う。互いの国々の人々が、同じものさしに気付くことができればすぐに問題を解決することができ、そもそも戦争なんて起こらないのではないか。では、みんなが同じものさしを持ち、戦争をしないためにはどうしたらよいのだろうか。

それは、私達一人ひとりがお互いを尊重することは大切だという考えをもつことだ。そうすることによって、少しずつ戦争のない世界に繋がっていくと思う。それは、できるときに無理のない程度に人に対する感謝の心、尊重する心をもっていくことだ。そうすればきつと、そのものさしは態度にも表れるようになり、他の人のものさしも見つけることができるようになるだろう。そして、自分と相手のものさしを比べた時、案外似ていることに気がつけばそこには、人々が分かりあって共存していく優しい世界が広がっていくのではないか。例えば、友達と言いたいあいになりそうになった時、悪気はないであろう人の言葉につい腹が立ってしまった時などに、これらのことを思い出し、まずは自分から始めてみようと思う。

優秀賞

思いやりのある未来へ

山陽小野田市立厚狭中学校 一年

豊嶋 花萌

「人権」と聞いた時、最初に思いついたのは、障害者の人たちに対する「差別」「偏見」でした。

祖父母の家の近くに盲導犬をつれて歩いている家族を私が幼い時からよく見かけていました。その家族は、三人家族で、お父さんとお母さんが、目が不自由で、お母さんが盲導犬を連れて、お父さんは、白杖を持って歩いています。

今年の春、祖父母の家に遊びに行った時、近くのスーパーで買い物をしました。その家族もスーパーで買い物をしていて、お父さんは白杖を持って歩いている、お母さんは、お父さんの服のすそを持って歩いていました。

私は、心の中で「盲導犬はどこにいるんだろう？お母さんは盲導犬がいなくても大丈夫な

のかな？」と思いました。そのお店は、盲導犬や介助犬は入店不可だった事を後から知りました。お父さんは、スーパーにいる周りの人達に何度も「すみません。すみません。」と言いながら歩いていました。中には迷惑そうな顔をしている人もいました。私は、そんな迷惑そうな顔をしている人を見て、心が痛くなりました。「あのご夫婦は何も悪い事をしていないのに、ただ二人で買い物をしているだけなのに、どうしてそんな迷惑そうな顔をするのだろうか？」と感じました。

そのお店は、少し狭い通路もあり、品物が入っているダンボールも、いくつか積み上げて通路に置いてあったりして、白杖を持って歩くには、配りよが足りていないと感じました。

買い物も終わり、店へ出るとお店の入り口にご夫婦のお母さんの盲導犬が、お座りをし待っているのを見ました。お店が盲導犬、介助犬は入店不可だから、外で待っていないといけなかったのだなと思いました。その時私は思いました。目が不自由な視覚障害者は盲導犬や介助犬が入れるお店ではないと買い物も行けないなんて、なんて不自由な世の中なんだろうと。お店側もどうして安全に買い物ができる環境を整えていないのだろうか。

あるテレビ番組で、盲導犬と一緒に暮らしている方が言っていた言葉がとても心に残っています。「盲導犬は、私の家族でもあり、私の体の一部でもある。」と言っていてこの言

葉がすごく心に響きました。

目が見える事は当たり前ではない。耳が聞こえる事は当たり前ではない。手と足がある事が当たり前ではない。と私の母が、いつしか言っていた事を、思い出しました。私は、真つ暗な世界も、音のない世界も、体の自由がきかない世界もどんな感じなのか分かりません。でも、障害をかかえた人のために何かできることをしたいという気持ちはあります。相手の気持ちまでも考えて行動する事が大切な事だと思えます。

他にも、車いすマークのついている駐車スペースに平気で車を停めている健常者を何度も見たことがあります。車いすを使用している方々のためのスペースなのに、そのせいで一般スペースに車を停めなければならなくなり、とても不便そうでした。また、街中にあがる点字ブロックの上に停められている自転車により、歩行のさまたげになったり、とても危険な事だと思えます。こういった健常者による思いやりに欠ける行為はとても悲しくなります。人権侵害は、相手の気持ちを考え思いやりにつたりすることができないから起こってしまうと思えます。障害の有無に関係なく、どんな人でも一人の人間、みんな平等だと思います。

先日、私の妹が宿題でユニバーサルデザインという物を調べていました。ユニバーサルデザインとは、すべての人のためのデザインを意味し年れいや障害の有無などに関わらず

多くの人が利用できるようにデザインする事だそうです。シャンプー容器のギザギザや点字、多機能トイレなどがあり、誰でも使いやすくわかりやすいものになっていました。妹と一緒に家の中にあるユニバーサルデザインを探してみたら、けっこうたくさんありました。障害者の方への親切な取り組みがまだまだ知らない部分がたくさんあるのだなと思いました。

健常者も障害者も差別なく、仲良く楽しく過ごす事ができる、当たり前になつてほしいです。障害者が健常者と同じように暮らせる社会になると良いと思います。

この作文を通して、「人権」についてよく考える事ができました。自分の価値観を人に押しつけない事、人の心に寄りそい理解し合う事が大切だと思います。

「人は皆平等である。けれど環境や年齢、身体能力などは同じではない。だからこそ、人としての尊敬の念や思いやり、いたわりの心を持つて接する事が大切なのだ。」と何かの本に書いていました。私達がこれから生きていく未来が今よりもっともっと思いやりのあふれる未来であつてほしいと願うばかりです。

自分らしく生きる

(非公表)

(非公表)

私の姉には手足に麻痺のある肢体不自由の障害があり、いつも車椅子を使用しています。姉が生活していくためには、常に誰かの介助が必要です。毎日の食事や入浴やトイレ、着替えや食事も一人ではできません。家族は姉のリハビリ通院や通学、毎日の生活の介助のために、仕事や外出を制限しなくてはなりませんでした。

また、姉は小さい頃から、保育園の入園や学校に入学するために、多くの機関に相談して、自分たちの気持ちや希望を伝えて、何とか進路を選んできました。障害があることから、受け入れてもらえない施設があったり、周りの人からなかなか理解してもらえなかったりと、乗り越えなければならぬハードルがたくさんあったと、両親は話してくれました。

また、姉との外出は、少しの段差やせまい通路、駐車所での乗り降りや、周りの人に特

に気を使います。

他の人が気軽にに行けるような場所も、事前に多目的トイレや駐車場の有無などの確認や、多くの準備をしなければいけません。

夏休みに、プールや海に行くことも、車椅子の姉を連れて行くのは難しく、家族で行ったことは一度もありません。バスや電車などの公共交通機関を利用するにも、事前の予約や駅がバリアフリーであるかを確認しなければ利用することができません。旅館やホテルに宿泊する時には、お風呂が貸切で利用できるか、エレベーターがあるか、食事はどのようにして食べるのかなど、多くの確認が必要でした。

外出はいつも自家用車で、買い物なども決まった場所に行っていました。そのため、私たち家族は、やりたいことや行ってみたい場所があっても、あきらめることが多くありました。そんな生活をする中で、姉も私たち家族も、自分がやりたいと思うことをがまんするのが、当たり前になってしまっていたように思います。

姉は、自分の生活の介助をする家族に遠慮して、行ってみたい場所や、やりたいことを言い出せないようでした。また、私たち兄弟も、自分たちの望みを簡単に口に出すことはしませんでした。自分たちががまんすること、それが普通のことだと思ってしまうのです。

けれど、そんな生活は本当に家族一人一人にとって、幸せなことなのか、私たちが家族全員が望むような、みんなが心から笑って暮らせる毎日は、どのようにしたら実現できるのか。

姉が成人した事をきっかけに、これから、障害のある姉と私たち兄弟が、お互いに幸せに、将来も安心して生活していけるのかを家族で考えるようになりました。

姉は、自立した生活をしたいと、自分の気持ちを家族に伝えました。家族は、姉が少しでも同年代の人と同じような生活ができたらと、その希望を叶えたいと思い、準備を始めました。

二十四時間介護サービスを利用できるところを探して、バリアフリーのアパートを契約しました。自分で働くことができない姉は、障害年金を申請して、受給が決まりました。そして、誰にも遠慮する事なく、自分らしく生きるため、姉は家から離れた場所で、一人暮らしを始めました。

姉は、一人暮らしを始めて、自分が行きたい場所に行きたい時に行けて、自分で買い物に行って、自分で選んだ好きなものを食べる、そんな当たり前の生活をする事ができたのです。

好きなアーティストのコンサートに行ったり、合唱練習に参加したり、今までできない

と想っていた新しいことにチャレンジし、自分自身で自分の事を決めていきます。

これらのことは、他の人から見れば、全て日常の普通のことかもしれません。けれど、私たち家族にとっては、とても大きな変化でした。

姉がやりたいことを自分の気持ちのままにできて、家族もがまんすることなく、やりたいうことをする、自分のことを自分で決める、それはとても人間らしい、幸せなことだと思えます。

障害があってもなくても、誰もが自分の気持ちに素直に生きられる権利があります。誰かが誰かのために、がまんしなくて良い、今まで以上に暮らしやすい社会になってほしいと思います。そして、私自身も自分が決めたことに責任を持って、自分らしく生きたいと思います。

第43回全国中学生人権作文コンテスト
山口県大会審査員(敬称略)

審査員長

山口県中学校教育研究会国語部長
(周南市立須々万中学校校長) 河辺哲也

審査員

山口新聞山口支社長	森脇直樹
山口県教育庁人権教育課長	中村直樹
山口県環境生活部人権対策室次長	安光直樹
山口県PTA連合会長	松田龍信
山口地方法務局長	中島仁志
山口県人権擁護委員連合会長	上田雅憲
山口県人権擁護委員連合会こども人権委員会委員長	原田茂樹

無断転載を禁じます

本作品集の作文を地方自治体が広報誌に掲載したり、学校が教材に使用される場合などには、最寄りの法務局又は下記にご連絡ください。

〒753-8577 山口県山口市河原町6番16号
山口地方法務局人権擁護課 ☎083-922-2295 (番号案内1)

○常設相談所(月～金 午前8時30分～午後5時15分 年末年始・祝日は除く)

山口地方法務局

人権擁護課	〒753-8577	山口市河原町6-16	☎083-922-2295
周南支局	〒745-0823	周南市周陽二丁目8-33	☎0834-28-0244
萩支局	〒758-0074	萩市平安古町599-3	☎0838-22-0478
岩国支局	〒741-0061	岩国市錦見一丁目16-35	☎0827-43-1125
下関支局	〒750-0025	下関市竹崎町四丁目6-1	☎083-234-4000
宇部支局	〒755-0044	宇部市新町10-33	☎0836-21-7211

2025年カレンダー



作：山口人権擁護委員協議会

1 (睦月)							2 (如月)							3 (蒸生)							4 (卯月)								
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土		
			1	2	3	4							1								1				1	2	3	4	5
5	6	7	8	9	10	11	2	3	4	5	6	7	8	2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12		
12	13	14	15	16	17	18	9	10	11	12	13	14	15	9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19		
19	20	21	22	23	24	25	16	17	18	19	20	21	22	16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26		
26	27	28	29	30	31	23	24	25	26	27	28	23 ³⁰ / ₃₀ 24 ³¹ / ₃₁ 25	26	27	28	29	27	28	29	30									

5 (皐月)							6 (水無月)							7 (文月)							8 (葉月)						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3	1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5						1	2		
4	5	6	7	8	9	10	8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
11	12	13	14	15	16	17	15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
18	19	20	21	22	23	24	22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
25	26	27	28	29	30	31	29	30	27	28	29	30	31	27	28	29	30	31	24 ³¹ / ₃₁ 25	26	27	28	29	30			

9 (長月)							10 (神無月)							11 (霜月)							12 (師走)						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
					1	2	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5						1	2			
3	4	5	6	7	8	9	7	8	9	10	11	12	7	8	9	10	11	12	7	8	9	10	11	12	13		
10	11	12	13	14	15	16	14	15	16	17	18	19	14	15	16	17	18	19	14	15	16	17	18	19	20		
17	18	19	20	21	22	23	21	22	23	24	25	26	21	22	23	24	25	26	21	22	23	24	25	26	27		
24	25	26	27	28	29	30	28	29	30	31	28	29	30	31	28	29	30	31									

みんなの人権 110 番 (全国共通)



0570-003-110

女性の人権ホットライン (全国共通)



0570-070-810

インターネット人権相談受付窓口

<http://www.jinken.go.jp/>



こどもの人権 110 番 (全国共通・無料)



0120-007-110

外国語人権相談ダイヤル (全国共通)



0570-090-911



人権イメージキャラクター
人KENまもる君・人KENあひみちゃん

